
線と羽、あるいは残された半分の可能性

夕焼け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

線

俺、今猛烈に悩んでるんだよね。

今世紀入ってもう多分コレぶっちぎりの勢いで悩んでる。

何を悩んでるか？

とっても簡単な事だ。

ここから飛ぶべきか、否か、だ。

あ？

何をそんなに嘆いてるんだって？

まだやるべきことがあるんじゃないかって？

は？何言っちゃってんの？

おおーきく勘違いしてんね。

言ってるだろ？

飛ぶか、否か、だ。

オマエさ、誰が死ぬつつた？

自殺？

するかよ馬鹿！

ちげーよ！飛ぶけど死なないの！

飛ぶってどういう事だと思っ？

飛び降りねーよばーか。

私には羽があって飛べるんです、って？

キタコレ。

はいはい、勝手に飛んでっちゃえよww

どこへでも行っちゃえ。

俺が言ってるのは、
飛ぶか、否かだっつってんだろ。
飛ぶんだよ。

そう、飛ぶの。

ブーンじゃない馬鹿w

オマエにはこの気持ちはわかんねえよ。

メンソウル
男魂って奴だ。

もしかしたらわかるんじゃないかってちょっとでも期待した俺が馬鹿だったね。

そもそもオマエ男じゃないもんな、メンソウル持ってないもんな。

OK。

よし決めた。

今決めた。

マジ決めた。

飛ぶ。

俺飛ぶ。

超飛ぶ！

3...2...1.....

！！

どうだ、見た？

今の見た？

俺かなり飛んだろ？

マジびびったろ。

ああ、言っちゃあれだけど俺の方がびびった。

あれだ、最初に飛んだ奴、誰だっけ？

あの有名な奴、えーと、

エジソンだっけ？

違う？

あ、ライト兄弟ね。

もう全然違うね。

いいんだよ！そんなんは！

黙れこらwww

ぎりぎりBカップの分際で！！

で何だっけ？

もう、さっきからうるっさいよww

お前のせいだ。

今俺すっげーいい事言おうとしたのに、

オマエのせいで分かんなくなつた。

弁償しろ。

俺の格言弁償しろ。

え？

は？私も飛ぶ？

何言ってるの？

オマエじゃむりだつつの。

馬鹿やめとけ！

マジやめとけて！

おま、ちょ！下見てみる！

落ちたらマジしぬつつの！

オマエじゃむりつつつてんだろ！

!!

え？

いや、まじ体うごかね…
声出ね……

おい？嘘だろ？
あれだ。

ちよつとこの下の辺りにこっさりマット敷いてあつて、
そこ狙つて飛んだんだろ？

………

おい、もういいだろ？

出て来いよ。

早く!!

どうせ服とか引つかかって登れねえとか、
そっいうオチだろ？

.....

もしくはあれか？

俺が覗いた所をびつくりさせようってか？

あっはっは、オマエじゃ無理！

オマエが500人同時に出てきても

俺を脅かすなんてマジ無理！

わかったら出て来いよ！

何してもおどろかねーからな。

見るぞ？

覗くぞ？

.....

.....

あ？

何あれ。

下で潰れてんの。

死んでんの？

まじで？

ナニコレ……………

俺のせい？

いや違うだろ。

俺やめろつつつたもんな。

てか誰のせいとか、何考えてんの？俺。

自分の彼女死んでんじゃん？

俺のせいじゃないとか、何いっちゃってんの？

意味わかんね。

てか死んでんの？あれ。

人に見えないんだけど。

でも、

でも、でも、でも

あの　ののあのあれ

れおれのかのじょが…あ？

飛んで

落ちた……………？

……………

「ユカ」

私ね、飛ぶって決めたのね

「マサノブ」

は？なに？飛ぶって。

ここから飛び降りんの？

やめとけマジ。

俺が悲しむぞー。

超悲しむぞー。

悲しすぎて化けて出るくらい悲しむぞー。

「ユカ」

何言ってるの？何で私が死んでアンタが化けて出んのよ。
てか飛び降り自殺しますなんて一言も言ってる無いじゃん

「マサノブ」

じゃあ何だよ飛ぶって。

「ユカ」

境界線。

「マサノブ」

キョウカイセン？

なんの？

「ユカ」

私と大事なものを隔てる境界線。
マサノブには見えない？

「マサノブ」

何？ユカもしかして

見えないものが見えちゃう能力発動しちゃった？

うっはー！！かけええ！

俺にくれ！

どうすんの？俺にも教えてくれ！

「ユカ」

ばか

「マサノブ」

ジョークですよ、ジョーク！

「ユカ」

私には、

ずっと超えられない境界線があるの。

マサノブがきつとどんなにがんばってくれても無理。

その線は私にもマサノブにも飛び越える事は出来ないの。

でも、それでもね、飛ぶって決めた。

超える事は出来なくても。

「マサノブ」

ばっか、オマエ俺の跳躍力しらねえな？

愛するユカの為なら

富士山の頂上からエベレストのてっぺんまでだって飛んでやるよ。
だからオマエはそこでノーンビリ待ってればヨロシ！

「ユカ」

マサノブ……一つ教えておくね。

エベレストの方が富士山よりだいぶ高いから

「マサノブ」

だーかーらー！

そんなカンケーねーの！

俺の愛は都庁の50億千万個分の高さだ！

「ユカ」

ありがとね、マサノブ………

「マサノブ」

ユカ、俺決めたぞ？

いつかね、ぜってーマジ飛ぶから。

その線飛び超えるから！

「ユカ」

ありがと………

そんな事あったな。

いつだっけ？

大事な日をいつも俺忘れちまうんだよなあ。

付き合いだした頃だっけか。

付き合いだしたのって中学の頃じゃん。

もう3年も前か。

あの頃は好きだったな、すっげー好きだった。
ユカの事。

もうこいつの為ならマジ死ねるって思ってた。
いつからだろうな、
それが逆になったの。

あれだ、俺が一度浮気したあたりだな。

あのあたりからなんかユカ急に優しくなつてさ。

正直浮気がばれた時は、あー！終ワツタ思ったよ、まじで。
そしたら泣きながらお前が謝るんだもんな、
意味わかんねーし。

でもとにかくそれからオマエが優しくなったせいで、
俺大分つけ上がったな。

正直今思い返すとちょっと調子こきすぎてたね。

あれだ、それまで俺が何やってもオマエ全然無感動だったから、
仕返ししてやりたくなつたんだ。

どーだ！辛いだろ！って、

俺はソレ2年間耐えたんだぞって、
言ってやりたかったんだろうな。

でも、確かに最初みたいにはトキめかなくなっちゃったけど、
それでもずっとオマエの事すっごい好きだったんだけどな。

だから…

俺、いつか飛ばなきゃって、

ずっと念仏みたいに、

ほんとにいつも思ってた。

オマエが泣いた時、笑った時、

それがどんなに俺のそばにあっても、

俺がどんなにオマエに笑いかけても、泣き喚いて見せても、

オマエからみれば俺は境界線を隔てた世界にいるんだって。

だから境界線を越えてオマエに触れたかった。

なんつったってこの性格だからな。

3年掛かった。

分かってたんだよ。

本当はもうそんな事必要ないんだって。

俺がほんの少し素直になってりや全部うまくいったんだ。

でも、俺、そういうの、そういう時だけうまく言えないの知ってる？

だから、こつそり夜ランニングとかしちゃって、

体鍛えて、

あの屋上の境界線飛び越えて見せれば全部オマエに伝わると思ったんだ。

全部……………

……………

サイレンの音が聞こえる。

近づいて、そして少しの間静まり、

そして遠ざかっていく。

その間、なぜか人の声は聞こえなかった。

くく飛び降りる
くく飛び超える

羽

「知らない男の子」

マジあんたの事が好きっす！

僕とどうにか付き合ってくれたらもう超最高っす！
色んな意味で！！

彼は私に言った。

最初、彼が何を言ってるのか分からなかった。

私は彼の事なんて知らなかったし、

なんか文法おかしいし、

多分からかわれてるんだろうと思った。

そして私は次の言葉を予測した。

きっと彼はこう言うんだ。

うわ、超ウケルんですけど！！

何照れてんの？

信じちゃったの？

ばっかじゃねーの？

あっはっはっは！！

つい去年までの事がフラッシュバックする。

そう、私は去年までクラスで苛められてた。

だから小学校の同級生とは違う中学に進学した。
きっとそれしか悪夢を終わらせる方法はないから。

彼の突然の告白は私を酷く混乱させた。

あの悪夢はまだ終わってなかったのか、と私は思った。

中学校に入ってもやっぱり友達がうまく作れず、
いつも教室の隅っこにいる私なんか告白するなんて、
きつと反応を見てからかいたいだけなんだ。
そう思った。

だから私は彼をキツと睨みつけた。
ここで怯んだらまたあの時みたいに苛められると思ったんだ。
だから思い切り彼を睨みつけてやった。

ワックスでツンツンに立てた髪、
かかとを踏んだ上履き、
シャツは第二ボタンまで開け、
裾のほうはズボンにいれずにでれつと出している。
ズボンもここぞとばかりにずり下ろして履いてる。
ズボンのベルトのあたりからチェーンが何本も垂れている。

ほら、どーみても不良だ。
やっぱり私をからかいたんだ。
そう思った。

ここで怯んだらまたあの時みたいに苛められるんだ。
顔だって今にも噛み付いてきそうなすごいしかめっ面だし、
耳まで真っ赤。

耳まで真っ赤？

よく見ると小さくブルブル震えてる。

眉間にしわは寄ってるけど、

目はうようよと泳いでる。

「知らない男の子」

ぶっはあああああ！！！！

！！

彼がすごい勢いで息を吐き、

そして慌しく息を吸って、

そしてまた吐く。

どうやらこの沈黙の間、

彼はずっと息を止めてたようだ。

私はついその動作を見てびくっとしてしまう。

目の前の人の唐突の動作が怖い。

知らない男の子が私に近づいてきて、にっこりと微笑む。

そしていきなり手を振りかざし、

私を殴りつける。

今まで何度もそういった仕打ちを受けてきた。

だから条件反射で身構えてしまう。

こればかりはどうしようもない。

彼が慌てて取り繕う。

「知らない男の子」

あ、ごめん！

びっくりした！？

でもあんたがなかなか答えてくれないから、
そのせいで酸欠になりそうだったんだよ！

そもそも何で彼が息を止めてたのかが分からない。

なんだか動作と声がやたら大きいヒトだ。

言葉と一緒に体が動いてるみたいだ。

そして表情もいちいちオーバーだ。

「知らない男の子」

うわー何その珍獣を見るような目！

俺だよ俺！！

高橋！

高橋マサノブ！

OK？

「ユカ」

高橋マサノブなんて人知らないんだけど……

「マサノブ」

うわ、なんて失礼なやつだ！

クラスメートなのに知らないだって！？

クラスメートくらい頭の悪い俺だって全員覚えてるぜ！？

さてはあれか？

あんたあれだ。

アインシュタインだ！！

「ユカ」

は？

アインシュタイン？

「マサノブ」

あれだよ、あの、なんか色々忘れていつっちゃうビョーキ！

「ユカ」

アルツハイマー？

「マサノブ」

そうそれ！

アルツハイマー！！

知ってんじゃない。

「ユカ」

アルツハイマーとアインシュタインって全然似てないよ。

「マサノブ」

そんな事はどーだっていいんだ！

で、あんたに惚れちゃったんですけど！

どーなのよ！？

返事はどーなのよ！？

なんだかどこまでも勢い任せな人だなあ。

こういうテンション苦手だな。

「ユカ」

そんな、いきなりどーなのよって言われても……困るよ。

「マサノブ」

困るって、

好きな人とか付き合ってる人とかいるの？

「ユカ」

いや、そういう訳じゃないけど……

「マサノブ」

じゃあ問題ナッシング！

俺と付き合ってしまえ！！

「ユカ」

付き合ってしまったって…………

「マサノブ」

…………駄目？

一転して急に彼は弱気になる。

しょんぼりとした声で、肩を落としてそう言う。
なんかジェットコースターみたいな人だ。

「ユカ」

いや、駄目も何も、
君の事知らないし…………

「マサノブ」

あーー！！

駄目だ駄目だ！

『君』とか超駄目！
もう全然駄目！！

いきなり彼が怒り出す。
なんなんだもう…………

「ユカ」

そんな、駄目とか言われても……

「マサノブ」

俺にはマサノブっちゅう立派な名前があるんだから、名前で呼んでくれ！

お母ちゃんが丹精込めてつけてくれた名前なんだよ！！

おうけい！？

「ユカ」

ご、ごめん……

「マサノブ」

よし、じゃあ早速練習してみよう！！

はい、マサノブ！

言ってみて！！

「ユカ」

マ、マサノブ……

「マサノブ」

……

彼が急にうつむいて静かになる。
よく見ると小さく震えてる。

また何か駄目だったかな……………

「ユカ」

あ、あの？

「マサノブ」

感動だ！！

お母ちゃん！！

俺は今猛烈に感動している！！

お母ちゃんがつけてくれた名前を俺の好きな子が呼んでくれた！！

もう、サイッコーだ！！

早速お母ちゃんに報告しに行かなきゃ！！

じゃあまた明日な、ユカ！！

マサノブはそう言って颯爽と駆けていく。
それが私とマサノブの始まりだった。

自分勝手に、勢い任せで、頭が悪そうで、
ちょっと不良っぽくて、髪の毛がツンツンしてて、
動きが大げさで、声が大きくて、
どうやら私の事が好き。

明日も学校でマサノブと会うのかと思うと、

正直複雑な気持ちだった。

うん、それがあの時の正直な気持ち。

それから幾らか月日が過ぎた。

はつきりと返事をしたわけじゃないけど、
なんか彼の勢いに飲まれてるうちに、
次第に付き合ってるみたいな感じになってた。

彼の事が好き？
どうだろう。
でも嫌じゃない。
そんな感じ。

.....

「ユカ」
ねえマサノブ、
マサノブって何かあるとすぐ「お母ちゃんに報告しなきゃ！」
って言うけど、
もしかしてマザコンなの？

そんな事がある時、学校の帰り道で聞いてみた。

「マサノブ」

母ちゃんはもう随分前に死んじったよ。

マサノブは遠くの方を見たまま立ち止まって言った。

「ユカ」

そーなんだ、ごめん。

嫌な言い方しちゃったね。

「マサノブ」

いいよ。

気にすんな。

そういつて私に笑いかける。

「マサノブ」

お母ちゃんはさ、

死んじゃってもやっぱり俺のお母ちゃんだからな。

大事な事は全部お母ちゃんには知ってて欲しい。

なんだかんだ言っつて俺、お母ちゃん尊敬してるんだ。
今つてさ、

親を悪く言うヤツ超いっぱいいるじゃん。

そういう奴つてさ、

大抵自分にとって都合の悪い事は全部親とか周りのせいにしてるんだ。

自分が不幸な事、

自分が駄目なヤツな事、

全部何かのせい。

自分を正しい側に置いとく為に親を悪者にしてるヤツいっぱいいると思う。

そういう奴つてやつぱ俺、嫌いだ。

お母ちゃんが昔俺に言っただ。

どんな不幸も、どんな災難も、

半分は色んなもののせい。

でも、残りの半分は自分自身のせいなのよって。

嫌な事、辛い事、悲しい事。

それはいろんなもののせいで起こる。

半分は確かに自分じゃどうしようもないもののせいなんだけど、
残りの半分は確かに自分自身のせいでもあるんだ。

昔はさ、そんな話されてもイマイチぴんと来なかった。

俺もガキだったしさ、俺馬鹿だったからさ。

いや、今でも馬鹿だけどさ。

でもお母ちゃんが死んで、何年か経った。
今はちよつとその意味が分かった。
お母ちゃんの言いたかった事がさ。

そりゃあお母ちゃんがいなくて寂しい時もある。
グレてこんななっちゃったのも事実だ。

でも俺は寂しいからグレたんじゃない。
寂しい自分に負けちゃったからぐれたんだ。
俺が駄目なヤツなのは寂しさに負けた自分のせい。
お母ちゃんが死んじゃったせいじゃない。

そう、自分のせいなんだ。
だからお母ちゃんがいらない俺にだって幸せになれるチャンスはある。
自分のせいで駄目になった半分の可能性は、
俺次第できつとどうにでも出来るから。

そう言ってマサノブがおどけてみせる。

「ユカ」
いいお母さんだったんだね。

「マサノブ」

へへ。

さ、ラーメンでも食って帰るか！

マサノブは私の前をずいずいと歩いていく。
手は繋がない。

マサノブは私が恐れてる事を知ってる。

私はとても多くのものを恐れてる。
頭ではわかってても、
心が怯えてる。

昔、隣の席の男の子に消しゴムを貸してあげた。
彼はクラスで苛められてた。

柳川ユキイチって子。
今でもよく覚えてる。
物静かだけど、悪い子じゃないって思った。
だから消しゴムを貸してあげた。

彼に消しゴムを貸した私もまた皆から、

「あいつの菌が移った」とか言われるようになった。
私もちよつと腹が立ってきて、

「彼は別に菌でもなんでもないよ！」って、言い返した。

徐々に苛めの矛先は私に向いて、
いつしか私が苛めのターゲットになってた。

柳川君は笑いながら私に言った。

「菌が移るから近寄るなよ」と。

別に彼の事が憎い訳じゃない。

あそこで彼が私を庇ってたら、きっとまた彼も苛められる側になつてた。

仕方が無いことなんだと思う。

きっと人なんてそんなもんなんだって分かってるつもり。
彼に限らずそう。

皆ある種の悪意を心に飼ってる。

人にこんな話をしてても大抵笑い飛ばされちゃう。

所詮小学生のした事だろうって。

子供なんてそんなもんだって。

そう、所詮小学生のしたこと。

でも、あの時の彼が見せた種類の悪意が、
とても多くの大人の心にも潜んでる事を私は知ってる。

テレビを見ても、本を読んでもやっぱりそう思う。

多くの人はとても根源的な部分に危うさと悪意を持ってる。

もちろん小学生のようにおおっぴらにそれを振りかざす事はしない。
でも、だからと言って小学生の時抱えていた悪意が消えたのかといえそうじゃない。

大人になって隠し方を知っただけ。

綺麗にコーティングして、時には形質を変えて、その悪意をひた隠しにしている。でもそれは確かにそこに潜んでる。

だから私は私に笑いかける多くの人が怖い。彼等も時と場合によって私に牙を剥く。その事を私は知ってるから。

だから私は恐れる。
私を好きだというマサノブのことも。

半分は自分のせい。

その通りだと思った。
私がマサノブを信じれないのも、この恐怖心が拭い去れないのも、きつと半分は自分のせい。

もちろん今までの私の人生がそれを容易じゃない事に変えたのは事実かもしれない。
でもその事実に甘んじてきた私の弱さ、抗う事を拒否した私の甘さ、それが人を信じれない一番の理由。

今、私の周りには境界線がある。
何人たりともそれを超える事は出来ない。
この境界線は私が私自身の弱さを誰かのせいにした事でより強固なものになった。

いつかは越えなくちゃいけない。

越えたいと思う。

マサノブはそんな気にさせてくれる。
だから私は彼といえるのかもしれない。

好き？

嫌い？

まだ分らない。

その答えはきつとこの境界線を越えれば自ずと見えてくる。

放課後の学校の屋上で私は言う。

ねえマサノブ、私ね、決めた。
飛ぶって。

彼はジョーダンを言ってそれを茶化す。

そして最後にこう言った。
俺が飛ぶ、と。

この線を突き破って、飛び越える、と。

私たちの物語がどういう結末を辿るのか、
それがどんなものであれ、私は受け入れようと思う。
そう、半分は自分のせい。

だからこそ、その半分は自分次第で希望にもなる。

残りの半分は様々なものにゆだねられている。
それが正しいものであれ、間違ったものであれ、
それは私たちの手の及ばないものだ。
きつとどうにもならない事の方が沢山ある。
それはしょうがない事だ。

私は私のせいで駄目になった半分の責を負い、
その半分に残された可能性を得る。

今の私にはそれで十分だ。

これが私の物語。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5470b/>

線と羽、あるいは残された半分の可能性

2010年10月17日03時04分発行